

舞鶴市糸井文庫蔵 『竜宮瓊説堂上雑説 通世界二代浦島』に見える

浦島伝説享受と玉取伝説 付、翻刻

畑 恵里子

一 はじめに

本稿は、京都府北部に位置する舞鶴市糸井文庫蔵『竜宮瓊説堂上雑説 通世界二代浦島（りゅうぐうのちんせつどうじょうのざっせつ）』を対象として、浦島伝説の享受史における本作品の特徴を、ごく簡易に整理したものである。本書の現在の所有者は舞鶴市、データベースは立命館大学アート・リサーチセンター（以下、ARCと表記する）による。

本書は、浦島伝説に玉取伝説が付加されている、いわゆる二次創作にあたる。浦島と乙姫とが地上で生活を共にしている点や、浦島と乙姫との間にうまれた長男で「浦吉」という名の若者に焦点が向けられている点などが指摘できる。玉取伝説と浦島伝説とのかけあわせは、近世の浦島伝説の草双紙では、しばしば見られる題材である。

二 玉取伝説と龍宮

さて、玉取伝説とは「大職冠」とも言い、幸若舞曲や浄瑠璃に見られる。

幸若舞曲の場合、室町後期の成立、作者未詳である。大職冠、すな

わち藤原鎌足が、八大龍王に奪われた宝珠を、契りを結んだ海女を使って奪い返すという筋立てである。謡曲「海士」^{あま}、幸若舞草子三六番の一「大職冠」として、足利時代に流通したという（注一）。

浄瑠璃の場合、近松門左衛門の時代物に相当する。正徳元（一七一）年、大坂竹本座初演であり、藤原鎌足による蘇我入鹿の討伐に玉取伝説が加わった内容となっている。幸若舞曲「大職冠」「入鹿」、謡曲「海士（海人）」（流派により「あま」の表記が異なる）などをもとにして作られたという。

新編日本古典文学全集『謡曲集』所収の「海人」では作者不明、梗概はおおよそ以下のようになっている（注二）。作品の展開の把握のため、まとめなおす。

房前的大臣は、讃岐国の志度^{しど}の浦で亡くなったと聞く実母の追善供養のため、当地へ赴いたところ、そこで一人の女と出会う。房前は、以前ここで海中から明珠を取り上げたという話を、女から聞く。房前は女に詳細を尋ねる。

すると、唐土から興福寺へ贈られた三つの宝物のうち、明珠が龍宮に取られたので、藤原の淡海公^{なんかいこう}は身をやつして志度の浦にくんだり、当地の海人と契りを結び、子を儲けた、それが房前的大臣であるのだと語る。

よって、房前は名乗り、さらに詳細を女へ尋ねる。

玉を取ってきたら我が子を世継ぎにすると約束されたため、海人は、縄を腰に付けて、剣を持ち、龍宮に飛び入って玉を盗み取り、逃げた。龍神が追いかけてきたため、剣でみずからの乳の下をかき切って、体内に玉を押し込め、地上に戻った。海人の命は失われてしまったが、玉は取り返されたのだ。このように女は語った。

この語りをした女は、自分こそ、実はあなた（房前）の実母であり、その時の海人の幽霊であると述べて、波底に消える。房前が供養をすると、龍女の姿で、教巻を手にしてあらわれて、舞を舞い、法華経の功德により成仏したと告げた。

日本の中世宗教・文学に詳しい阿部泰郎は、幸若舞「大職冠」について、次のように解説している（注三）。一部引用する。

大織冠藤原鎌足は娘の紅白女（こうはくによ）を唐の太宗に嫁がせる。太宗はその返礼に万戸將軍を使者として釈迦の靈物を納めた玉をはじめ多くの宝物を鎌足に贈る。途中、修羅をかたraftてこの玉を奪おうとした竜王は万戸に退けられ、計略を用いて竜女〈こひさい女〉を万戸の船に忍び込ませる。色香に迷った万戸は竜女に気を許し房前（ふささき）の浦の沖で玉を盗まれる。これを聞いた鎌足は身をやつして房前の浦に下り、海女（あま）と契って子をもうけ、素性をあかして海女に玉を取り返すことを頼む。海女は竜宮に忍び入り首尾よく玉を盗むが、小竜に見つかって食い殺される。その死骸を引き上げると玉は乳房を切り裂いて隠れていた。玉は興福寺の本尊の眉間に納められ、子は大臣藤原房前となった。（中略）能の《海士（あま）》と同材であるが、能

が主として讃岐国志度寺縁起の絵解きの台本によるのに対し、幸若舞は《大鏡底容鈔》や《春日秘記》などにうかがわれるような中世南都に流布した興福寺、春日社の民衆的な縁起の唱導にもとづく。興福寺、春日社の縁起では藤原不比等の物語となっているが、幸若舞では姉妹作《入鹿（いるか）》が鎌足の出生譚を扱うのを受けて、本作も鎌足の物語として統一され、万戸と修羅の合戦や万戸と〈こひさい女〉との問答など本筋の物語に芸能上の趣向を加えて物語をふくらませている。

基本となるのは、龍王に奪われた藤原家由来の宝珠を、海女に頼み、龍王から奪い返して再び手中にするという筋立てである。自分の身を犠牲にして龍宮から玉を奪い返すというつとめを、海女は果たす。関係を持った海女へ玉取を依頼するのが、大職冠たる藤原鎌足であったり、淡海公たる藤原不比等であったりして、必ずしも一定していないのだが、ここでは、玉取伝説は浦島伝説とは別話でありながらも、同じく龍宮を舞台とする内容であることを押さえておきたい。

三 書誌情報

舞鶴市糸井文庫について簡易に触れておく。

本文庫は、一九四九年より舞鶴市指定文化財とされている。京都府北部を舞台としている大江山・浦島・山椒（山庄）大夫などに関する近世・明治期の資料が、国内でも集中的に集められている。

糸井文庫の蔵書を分類した舞鶴市糸井文庫の目録にあたる『丹後郷土資料館目録』では、『竜宮瓊説堂上雑説 通世界二代浦島』を、黄

表紙・合巻のカテゴリ、特に黄表紙に位置づけており、作者は飛田琴太、作画は記載なし、天明四年板行と整理している（注四）。糸井文庫の本来の所有者は糸井仙之助、本目録の作成者も同氏である（一八七四～一九四九年）。京都府与謝郡出身、故郷である丹後地域にゆかりの古典籍を蒐集した実業家であった。後に、舞鶴市が管理するようになったという。

A RCのデータベースである「舞鶴市糸井文庫閲覧システム」では、本書を黄表紙とする（注五）。黄表紙とは草双紙の一つであり、文字通り、黄色い表紙を持つ本である。代表的な作者に、恋川春町や山東京伝などがいる。江戸後期、一七七五（安永四）年から一八〇六（文化三）年頃を中心に隆盛した。しゃれや滑稽、風刺がふんだんに取り込まれた大人向けの絵入りの小説である。形としては、半紙二つ折本であり、一冊五枚から成っていて、二、三冊で一部となる。A RCでは、作は飛田琴太、画は古阿三蝶としている。判型は中本（一八・六×一三・七センチ）、巻冊は二冊（上・下）である。二冊で一セット、帙破れである。刊行年は文化元（一八〇四）年、制作は鉛屋 安兵衛他としている。本データベースの書誌情報では次のように説明している（注六）。

板元、作者等は『黄表紙総覧』に拠り補った。なお、初版本は天明四年の刊行であるが、本書は作者、画工署名が削除されていることから『黄表紙総覧』に指摘のある文化元年刊の黄表紙集『絵本東土産』四編第十冊に綴じられた再摺再板本と考^(ママ)えられる。

国立国会図書館デジタルコレクションにも、本書は『通世界二代浦島』としてその名が見られる。舞鶴市糸井文庫本との相違点は、出版

年が天明四（一七八四）年となっている点である（注七）。作は飛田琴太、画は古阿三蝶など、その他はほぼ同様である。

さて、作者の飛田琴太（とんだことだ）とはどのような人物か。国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」によれば、本稿で取り上げる『通世界二代浦島』を含めて、合計四点が、飛田琴太の作品として指摘されている。作品名は、『大江山二期栄（おおえやまにこのさかえ）』（天明六（一七八六）年刊）、『三国一大通之本地（さんごくいちだいつうのほんじ）』（天明四（一七八四）年刊）、『其見乎有難山（それみたかありがたやま）』（天明四（一七八四）年刊）、全て黄表紙である（注八）。

作画の古阿三蝶（こあみちょう）については、生没年不明、「江戸時代中期の浮世絵師、戯作者。画号は江戸小網町にすんだことにちなむ。鳥居清長風の美人画をかき、また黄表紙などをつくった。天明（一七八一～八九）のころ活躍。筆名は飛田琴太。」（注九）とある。そのため、作者である飛田琴太と作画者である古阿三蝶とは同一人物であり、役割によって名前を使い分けていたということになるのか。

古阿三蝶という名のほうが、記録は多い。江戸小咄本が形成されつつある安永期（一七七二年頃）から寛政期（一七八九年頃）初頭の作品をおさめている『江戸小咄集 一』の「定本 笑咄本 小咄集 書目年表（一）」にもその名が見えている（注一〇）。国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」では、「古阿三蝶」名義の作品は合計一四点である（注一一）。それによれば、黄表紙である『上巻絵二つ印籠（あげまきえふたついんろう）』（天明六（一七八六）年刊）や、『八代目桃太郎（はちだいめもたろう）』（天明四（一七八四）年刊）

などがある。このように、作画が「古阿三蝶」とされていて、必ずしも「飛田琴太」名義とは限らないものも散見される。

四 『竜宮瓊説堂上雑説 通世界二代浦島』の梗概

さて、『竜宮瓊説堂上雑説 通世界二代浦島』の梗概は以下のとおりである。

面向不背の珠を龍宮へ奪われてしまったため、珠を奪い返すようにと、淡海公すなわち藤原不比等は、志度の浦の海女へ依頼する。海女人は歌をうたいながら楽々と龍宮へ泳ぎ着き、龍王と対面する。

龍王は玉を取りに来たという海女の事情を知り、自分は玉を望んではおらず誤解であると述べて、何とかして地上へ返したかったが、浦島は地上へ戻ってからは連絡もないままであったため、いかんともしがたかったところ、折よく来てくれたとして、海女を歓待する。浦島と結婚した乙姫の妹が二代目の乙姫になっていて、龍王と共に、海女を丁重に遇した。

その後、海女はあっさりと面向不背の珠を入手して、おまけに珊瑚などの高価な土産も龍王からたつぷりと得て、地上に戻る。

淡海公は喜ぶ。帝から、海女を妻とするようにとの言葉を受けて、海女は「讃岐のかた」としてかしづかれるようになった。

淡海公は龍王への返礼を思案する。その時、使者として適任とされたのが、龍王の婿たる浦島であった。

玉手箱をはじめとする多くの宝物を獲得して、乙姫と共に地上へ戻った浦島は、乙姫を妻にして平和に生活していた。兄を浦吉、弟を島蔵

という、二人の息子を儲けていた。乙姫が玉手箱を厳封したため、浦島は若く色男のままであった。

使者には浦吉が選ばれた。淡海公から手紙や贈物などを預かり、祖父にあたる龍王のもとへ、淡海公の使者として赴くこととなった。

実は浦吉は、宝物を龍宮からたんまり得ようと目論むような若者であった。龍宮の姫君である二代目の乙姫を口説こうともしていた。しかし、うまくいかなかった。結果的に、龍王にとって孫にあたる浦吉の印象は悪く、二代目の乙姫の評価も得られなかった。思惑がはずれた浦吉は、早々に地上へと戻った。

子のなかった淡海公は、浦吉を養子とした。浦吉は出世、殿上人となり、大臣となった。浦吉は「不届き的大臣」と呼ばれるようになったという。

さて、このように、浦島伝説を下地としながら、中世以降に伝わるようになった玉取伝説を取り込み、二次創作をしているのが、『竜宮瓊説堂上雑説 通世界二代浦島』であると、ひとまず指摘しておく。

浦島や乙姫本人の姿はほとんど見られない。そのかわり、龍王、乙姫の妹にあたる二代目の乙姫、浦吉などが活躍している。相違点は多い。

興味深いのは、「桃太郎が鬼ヶ島、舌切雀の爺、とかく宝物」（下巻二丁裏）という一節である。当時、五大昔話として流通していた『桃太郎』や『舌切雀』への言及が見られるばかりでなく、「宝物」を多く獲得して利益を得る作品という点が、ひとつの共通項として、作中人物である浦吉の台詞を通じて語られている。浦吉が打算的な人物であることが、こうした他作品の引用表現からうかがうことができるし、当時の昔話や伝説の享受の様相も知ることができる。

五 おわりに

近世では、同じく龍宮を舞台とする玉取伝説が、浦島伝説へ加わってくる作品が見られるようになる。『桃太郎』や『舌切雀』などの作品もさりげなく重なりあい、展開している。かつては、命懸けで龍宮から宝珠を奪い返すという悲壮なあの玉取伝説は、本作品では、楽々と入手されてしまうものとなっている。あれほど血を流しながら、男と子のために命を賭して身を刻み、玉を地上へと取り戻した海女の姿は、ここにはない。浦島自身も、乙姫自身も、その存在は稀薄である。二人の息子の浦吉は、当初より多くの宝物を得ることを望んだり、祖父である龍王から幻滅されたりするなど、どちらかといえば、享乐的で墮落的な人物という印象が与えられている。しかし、そんな浦吉が、淡海公の養子として大臣にまでなり、現世で栄華を得るという締めくくりとなっている。

幸福な展開を持つ二次創作のパロディとして、浦島伝説が玉取伝説と繋がりあい、享受されている一端を指摘した。

(注一) 森林太郎・村松武雄・鈴木三重吉・馬淵冷佑『日本御お伽集 二 神話・伝説・童話』(東洋文庫、平凡社、一九七三年)。「付録(原版巻末「解説」)」参照。

(注二) 『謡曲集』所収「海人」(新日本古典文学全集、小学館)。

(注三) 担当 阿部泰郎、項目「大職冠(たいしょかん)」(『世界大百科事典』平凡社)。

(注四) 糸井仙之助編『丹後郷土資料目録(改訂版)』(舞鶴市教育委

員会、一九五七年初版)。

(注五) 立命館大学アート・リサーチセンター「糸井文庫閲覧システム」(https://www.dh-jac.net/db1/books/search_maiduru.php 二〇二二年二月一〇日閲覧)。

(注六) 立命館大学アート・リサーチセンター「糸井文庫閲覧システム」(注五) 前掲DB(二〇二二年二月一〇日閲覧)。

(注七) 「国立国会図書館デジタルコレクション」(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8928665> 二〇二二年二月一〇日閲覧)。

(注八) 国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/> 二〇二二年二月一〇日閲覧)。

(注九) 『日本人名大辞典』(講談社)。

(注一〇) 宮尾しげを編注『江戸小咄集』(東洋文庫、平凡社、一九七一年)。

(注一一) 国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」(注八) 前掲DB(二〇二二年二月一〇日閲覧)。

付、翻刻

凡例

一、舞鶴市糸井文庫に所収されているものを底本として翻字する。立命館大学アート・リサーチセンター「舞鶴市糸井文庫閲覧システム」の画像データを基本的に使用する。必要に応じて、舞鶴市糸井文庫本を直接確認する。

https://www.dh-jac.net/db1/books/search_maiduru.php

一、「国立国会図書館デジタルコレクション」を参照する。使用した場合は適宜明記する。

<https://dl.ndl.go.jp/>

一、かな遣いは底本に拠る。濁点、句読点、半濁音、「」（会話文）、改行を適宜施す。

一、繰り返しを示す踊り字（く、ゝなど）は、それぞれ、もとの字に置き換える。

一、底本に促音や拗音がある場合、小さく記す。

一、漢字の字体や送りがないは、こんにちの一般的な用法に近づける。

一、底本にふりがながある場合、（ ）内に原則記す。

一、文字の判読が不可能な箇所は□で示す。

一、底本が漢字表記であっても、ひらがなに改めたものがある。底本がひらがな表記の場合であっても、漢字に改めたものがある。

翻刻

上巻

（一丁表）

唐土高宗の後より捧げたる花原磬（けい）、泗浜（びん）石、ふたつの宝は到着し、面向不背（めん・こう・ふ・はい）の珠は龍宮へ取られ、淡海公はなはだ手こづり給ひ、讃州志度の浦の海女（あま）人にいちゃつき給しに、さすが淡海公、御手ありけるにや、玉の事を御頼みありしに、海女人、承知（せう・ち）にて、「今日（けふ）は天気もよいから取ってまいりましょう。」と、井戸掘りが井戸へはいるくらの気くらい、「約束の縄をつけぬか。」と言へば、「何、そんな面倒なものを。」と、どんぶりこ、と飛び込み、寄せくる波を漕ぎわけて、「何よゑえ。」と歌をうたいながら、海底深く泳ぎゆく。龍宮でも深くのぞむとみへたれば、たやすく取り返すことはなるまいと、淡海公、ひやひやもので案じ給ふ。

（一丁裏・二丁表）

海女人は難なく龍宮まで泳（をよ）ぎつき、玉のありどころはと、うかうか行て見たところが、なるほど絵に描（か）いたとおり、門番の菖蒲革、出合（でやい）が見付て、芝居のさがりませいいいふ身で、海女を龍王の御前へともない、
「そんならあの玉を取り返しにきたのか。それはよかった。もとの玉をおれが望むなどと、日本ではいふそうなが、よくつもってもみやれ。なんぼ欲しいとて、理不尽にひったくられるものでもない。あれは遣いの唐人めが、うぬが粗相で船から落として、おれにかぶせたの

だ。」

「龍宮のもとより、鳴神もどきといふ手で取る気もなければ、ありのままに玉をおもらい申にまいりました。」と言ふ。

「ならいに死人さへ忌むものを、仏の像のあるものを、おれが何（なん）にするものだ。そうだとて粗末にもならず、ああしてをけば、万人だの何のと、たいてい失脚がかかることではない。どうぞ日本へ返したかったが、浦島はとうに帰るし、便りがなかったに、よく取りに来さした。まづ休息しやれ。」と産むが易いものなり。

（二丁裏・三丁表）

海女人は大きに安堵し、龍王よりいろいろのご馳走、今まで女のを客は初もの、二代目の乙姫様が喜び、女は女同士お氣があい、山海の珍味といふところを、魚などはご馳走でなしと、精進物の油揚げ、湯葉などでもてなし給ふ。

「お慰みよ、京鹿の子などは結句。」

「を珍しくもあるめへ。」

「どふぞ日本へご消流（せう・りう）においであそばしませ。浜村屋、紀伊国屋、よし町の音羽屋がいきまをもお目にかけたい。」

「姉様は浦島さんといふ御前（おまへ）のお国の人と日本へ行つて。」
「わたしらも芸者、島田の結い様（やう）を習つておこうじゃあねへか。」

（三丁裏・四丁表）

龍王いろいろもてなし給ひ、「日本でもさぞ案じよふから、早く玉を

渡しませう。」と、かの玉を海女人に賜り、「土産にしやれ。」と枝珊瑚種（えだ・さん・ご・しゅ）の何百何十両ぐらいするのをくだされ、送り人は「おととはやられまい。」と、を端（はした）のを河豚、「玉は首へかけて行がよい。」と財布までくだされ、残るところなくお氣がつき、乙姫様は名残惜しいとてをむづかる。海女人も今更のよふになり、ただお辞儀ばかりでおはする。

「かならず乳（ち）の下を搔き切りなどといふ無駄わ、よしやれ。」

「ありがとうござります。さぞ淡海も、喜びますでござりましょう。」
「わたくしがを供いたしますから、少しもお氣遣いはござりません。」

さぞ淡海様がお待ちかねでござりましょう。」と、おふぐ、とんだきれ者なり。

（四丁裏・五丁表）

海女人は志度の浦へ帰り、一部始終（いち・ぶ・し・じう）話しければ、淡海公大きに喜び給ひ、そして送りの者はと言へば、「汀から帰しました。」と言ふ。「やれやれここまで連れてくればよいに、礼を言わふものに。」と残念がり給ふ。

さて此玉、手に入からは、長くこの地に足を止（と）むべきにあらず。ひとまづ帰洛（きらく）（きらく）なし、追（を）って海女人は迎ひの水主（かこ）とは久しい者ゆへ、疑わぬよふに山上源内を残し置き、玉を取ったが嬉しさに、吉日もゑらまずに旅立し給ふ。

「これはやっぱり龍宮の役者、不動で売りますか。」

「わたしは珊瑚種（さん・ご・しゅ）はまるいものかと存じました。このやうな祭のとき見たばかりさ。」

「またひょっと海へばかんとやってはならぬから、陸（くが）をゆかふ。」

「お船はご無用にあそばしませ。」

（五丁裏）

淡海公、玉を後生（ご・せう）大事に禪（ふんどし）へくくりつけぬばかりにして都に着き、右の趣（をもむき）、天頂に達しければ、天氣ことに麗しく、「早くその賤（しづ）の女、召しのぼせて、淡海が妻となせよ。」と、禁裏様までお世話おなされける。

年延（とし・ばい）なく、下（げ）衆は御天の下、率土（そつ・ど）のうち王土にあらざるなしと関心すれば、位階公家衆は「その海士が龍王にひとつ授けたらう。」とも言ふ。又、「龍王が通の気取りであらふ。」と言ふ。とりどりの評判なり。

下巻

（二丁表）脱落

【二丁表については、国立国会図書館本を参照した】

（二丁表）

さっそく志度の浦へ迎いをたて、海女人を、そのまま「讃岐のかた」と、かしづかれ、玉を取ってきたと言ふ。お顔もなされず、たきほしのごぜんはもたれるなどもぎよいなされず、やっぱり昔をお忘れなされず、御夫婦仲も何だかめったにとけれとも、どうしたことか、御子のないは源内はじめくろふがり、今の栄華（ゑい・ぐわ）を思ふにつけても、龍王の親切忘れがたく、何とぞ礼をしたいと思いますし召せとも、

龍宮への三度飛脚もなし。源内に言いつけても、「なんぼのきでも、こればかりは御用しや。」と尻込みするも□つとも、奥様はまたおいでもなさるふがをとまん□□しにならねばならず、それでは変哲もなしと、これにわしらわしら、大にふさぐ。

源内きつと考へ申けるは、「うけたまわりをよびました浦島太郎は、龍王の婿でござれば、これからさくとたよりのないことはないはず□まへをたのみをされませい。」と、さすが御家老、よい分別なり。

（一丁裏・二丁表）

浦島は龍宮より玉手箱、その他（ほか）、いろいろの宝をもらい、乙姫をともし帰り、手前は七千歳ほどになれども、乙姫様が玉手箱へはしっかり封おつけておき給ふゆへ、年の寄る氣遣いちつともなく、いつでもきんきんの色男。二人の子をもうけ、兄を浦吉、弟（をとこ）を島蔵、兄は今年十八、油断のなさそうな目つきにて、かのものがたくさんあるからは、やうものは人さきへこしらへ、年中、煙管（きせる）と鼻紙袋の工夫に心肝（しん・かん）をいため、初鰹を人先へ食わんと心をいためる。

「お頼みの趣、委細承知いたしました。しかし、便りと申て手がめが十七、用事でもござりますれば、これを遣わします。」

「左様な御用ならば、目ばかりでもなりますまい。わたくしもよいついでなれば、よいかどうかは存知ですが、見かけはかよふに若く見へますが、やがてあの亀と同年ぐらいゆへ、はるばるの海上は、ちと、まいりにくし。幸い、倅、浦吉はまだちい龍王に会いませぬゆへ、これを遣わしませうから、お心置きなく御用を仰せつけられませ。」

(二丁裏・三丁表)

浦吉はいよいよ龍宮への遣いに頼まれ、こいつには何か手のありそふな如く工夫する。

「まず桃太郎が鬼ヶ島、舌切雀の爺(ぢぢい)、とかく宝物おもらってくる。眼前、親父(おや・ぢ)はおふくろとのいちゃつきで龍宮の婿になり、いつまでも色男でいる箱をもらい、どうしておれは孫の年なり。おれが行ったらさぞ祖父様(ぢい・さま)も目わあるめへ。何でも宝物をまんともらい、お姫様もあるそふなり。どふぞわけありといふところをこじつけて、間がよくばお姫様をも連れてこよふ。」し□ふしてその宝物のこっちで、まづ二三千朝打ち出して、寝屋でひとり松葉屋で、ひとり請け出して、こをしてそれからこふとあれをあと、よしよしと、こくふに嬉しがる。

「案じの土産がありそふなものだ。祖母様(ばあ・さま)は今までの草双紙にはないが、大方(おふ・かた)御息才だろふ。そふならこれへ着せん一斤に、唐銭などといふがどふぞ何両二へんくらいづつのところでしまいてへ。あの人はなんだか滅多に気張って礼をするが、あれほどやるにはおよばぬ。」と少々くすねかね、みちといふ景清をもはたらく。

(三丁裏・四丁表)

浦吉は土産物、届け物を荷作り、乗りかけの亀頭(きとう)で龍宮へ急ぐ。

「わたしも度々龍宮へ行ったが、二のあるは今度が初(はつ)さ。」

「乙姫さんは、役者じゃあ、どふいふところを鼯(ひき)なさる。たきのやが訥子(とつし)といふ格好で、またもふちっとたけへとこで三升に、松助などか。」

(四丁裏・五丁表)

浦吉は龍宮へ着き、淡海よりの進物、書状を披露して、はじめて龍王へ対面する。

「やれやれ、浦吉とはそちか。きつい精神、とと様もかか様もかわることなしか。久しく便りがないから、どうかと案じていた。かか様に、ちと逗留にござりたい。やれ、まづ、ゆるりと休息しやれ。」ところろして喜び給ふ。浦吉は間続きがよく、「これでは土産しかりだ。」と心に喜ぶ。

「かか様に言ふまでじゃねへが、玉手箱の蓋よくしておけと言やれ。」浦吉はまづ、目算のとをり、乙姫様へあたってみようと、総銀の扇へ手前が古句を書いてしんしゃ訥子の偽筆、浜村屋のとうこうかうをこじつけて、「これはわたくしが土産。」と出してみたところが、根っから乙姫様うつりが悪く、「このしんしゃ屋訥子といふは何だへ。」。そしてよくもないでどたと張り込まれ、ひとつまんが狂ふ。

「なるほど、なんぼ通世界でも龍宮の御姫様が芝居はご存知ない。ばつなりやゑぎりが入水は、を姫様のお生まれなさる前のことゆへ、芝居は根っからこつなり。」

龍王、淡海よりの書状を見給ふに、進物の白とあわず、「これは、浦吉があのだ目つきでは、景清だな。」とがんつき給ひ、お孫なれど少し愛想がつき、大概にあしらいおき給ひ、お姫様のほうではぎすぎすし

た、好かねへといふ符牒がつき、胸算用とは大違い、どうかそこ気味悪ひようになり、そふそふ帰る。

「総銀だけうつぞ。やっぱり細金が調子引きのことだぞ。」

(五丁裏)

浦吉は、龍宮は少しかぶりの筋なりしが、淡海公は至極よく受け取り給ひ、御子なければ養子にもらひ給ひ、思ひも寄らぬ殿上人になりける。これを「不届きの大臣」と申奉るとかや。

謝辞

資料掲載を許諾した舞鶴市へ謝意をあらわす。本研究はJSPS科研費JP21K00294（日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）「海洋文化圏から見る浦島伝説の宗教観」研究代表者 畑恵里子）、および、立命館大学アート・リサーチセンター文部科学省国際共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際共同研究拠点」国際共同研究課題〔研究設備・資産活用型〕採択課題（研究代表者 畑恵里子）の成果の一部である。